

無条件の愛の学習と経済学

大垣昌夫

奨励者紹介〔おおがき・まさお〕

同志社大学経済学部特別客員教授

しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

（マタイによる福音書 5 章 44 節）

今日は奨励させていただく機会をいただき、多くの方々に参加していただいてありがとうございます。私は敵をも愛する無条件の愛の学習を行動経済学という経済学の分野で研究しています。私は 45 歳までは、新しい行動経済学と対比される伝統的経済学の分野で研究していました。特に消費と余暇から効用と呼ばれる自分の生活満足度を最大化する行動と市場経済を研究していました。その頃の私はキリスト教を理解しないで嫌っていました。

2001 年に 43 歳のとき、米国同時多発テロが起きました。当時私はオハイオ州立大学で伝統的経済学を教えて研究していました。このテロの約 1 年前に家族を連れてニューヨーク観光し、世界貿易センターの隣のマリオットホテルに泊まりました。そのマリオットホテルがテロで崩れ去ったとき、テロリストを敵として憎む激しい感情が起こり約 2 年間は当時の米国のテロとの戦争という考えに共感していました。しかしテロの約 2 年後に、ふとテロリストも自分と同じ気持ちなのだろう、と気づきました。自分たちの家族や友人たちが、米国の政策によって命を奪われるので、米国で税金を払っている人たちが憎いのだろう、と思いました。そうであってもテロリストは邪悪だと思いましたが、憎しみの連鎖の中にいる自分も邪悪なのか、と考えざるをえなくなってしまいました。

すると、小学校 5 年生くらいのときに西洋文化に興味を持って友人から借りた新約聖書の「汝の敵を愛せよ」というイエスの言葉が心の奥で響くようになりました。しかし、試みにテロリストが家に来て家族の命を奪おうとする状況を想像してみると、どうしてもそのようなテロリストを愛せない、と思いました。そこで生まれて初めてイエスから学ぶために聖書を読んでみることにしました。

聖書を読みながら、クリスチャンの友人たちに質問するうちに、無条件の愛で愛す純粋な動機以外の不純な動機で行動することは神からのずれで、このずれのことを聖書は罪と呼ぶらしい、と分かってきました。そして、2003 年 4 月 18 日の朝、目覚めたときに、「あなたには無条件の愛で愛する力はないが、神にはある。自分の力を頼ることをやめて神に頼って生きていきなさい」という声が心の奥から聞こえてきました。このことに納得し、その朝のうちに自分の罪のために十字架にかかって血を流されたイエス・キリストを信じて、神に祈って無条件の愛をだんだん学習していけばよい、と考えるようになりました。イエス・キリストを自分の罪のために死なれた自分の救世主と信じて受け入れました。

敵をも愛するために信じたのに、なぜか一時的にいろいろなものが嫌いになりました。信仰を持つまで、経済学は「困っている人たちのことは市場と政府に任せればよい」と教えていると考えていました。このような教えはイエス・キリストの教えと相いれない、と感じ、

経済学を教えるのも研究するもの嫌になり、経済学者を辞めたいと思いました。牧師に相談したところ、「あなたは経済学者として召された。そのことにはきっと意味がある。経済学者を辞めることを考える前に、信仰を持ったときにあなたの経済行動で変わったことがあるはずだから、そのことについて考えてみなさい。きっとヒントが得られるでしょう。」と助言をくださいました。自分の経済行動について考えてみると、信仰を持つ前は寄附をすることが嫌だったのが、それほど嫌ではなくなったことに気づきました。考えてみると、アメリカではよく家に「アフリカの子供たちが飢えて命が危ないので寄付してください」という募金の方々が来られ、私は心の中で、「確かにアフリカの子供たちは気の毒だが、考えみると、自分の可愛い子供たちだって、明日に事故にあったり難病にかかったりするかもしれない。そうなったら1円でも足りない自分の子供たちだって命が危ないことになるかもしれない。寄付するよりも貯金がしたい。」と思っていました。しかし、信仰を持つてからは、「神さまは自分の子供たちを無条件の愛で愛してくださっていて全知全能の力を持っておられる。もしも子供たちが事故にあったり病気になったりすれば、それは無意味な偶然でそうなるのではなく、子供たちの人格的な成長というような何かの意味があるはずだ。そうすると今でも自分の子供たちが苦しむのは嫌だが、怖いと思う必要はない。」と考えるようになり、だんだん自分の子供たちが苦しむことが起こるかもしれない、という恐怖から解放されて、アフリカの子供たちのためにもできるだけ寄付をしたい、と思うようになっていっていました。

この経済行動の変化は、大垣家の宗教である仏教からキリスト教に自分の宗教が変化したことが原因ではない、と思いました。仏教もキリスト教も困っている人たちを助けることと奨励しています。これは「苦しみの意味」についての世界観が変わり、自分の行動を変えた、ということに気づきました。そこで世界観が経済行動に与える影響を研究していこう、と思いました。このような研究は伝統的経済学の研究とはいえませんが、行動経済学の研究となります。

しばらくして、伝統的経済学が悪いのではなく、自分が寄付をしたくないときに「困った人たちは市場に任せておけばよい」と伝統的経済学を悪用していた自分が悪かった、と気づくようになりました。今でも世界観の経済行動への影響は行動経済学で研究を続けていますが、違う研究トピックのために伝統的経済学が道具としてより適切な場合は、迷わずに伝統的経済学を用います。

行動経済学と深く関連するのは幸福の研究です。さまざまな研究で、多くの人々は、どうすれば自分は幸福になる、という予測が大きく間違っていることが示されています。つまり幸福に関する世界観が、間違っています。この世界観の間違いが経済行動に影響します。多くの人々は「自分がお金持ちになったり、有名になると幸福になる」と予測します。しかし、実際には、多くの人々は、人間関係をよくし、共同体や社会に貢献すると幸福になります。新島襄の言うところの智徳併行の教育で知識や美德を獲得して共同体や社会に貢献する充実感としての幸福を得ることが、真の幸福への道だと思っています。

「幼児が井戸に落ちそうになったらはっとする」という孟子の惻隱の情は、誰にでもあり、これは「無条件の愛」にあこがれる良心の働きのひとつと考えられます。共同体や社会に貢献するときの純粋な幸福は良心の感じる幸福で、自分の消費と余暇が増えると「生き残り」のための遺伝子の奴隷としての体の満足感だと考えています。2つが一致し

ない場合、良心が無条件の愛の動機でしたいことを妨げる誘惑が心に生じてきます。良心が心の中でリーダーシップを取るようになっていく無条件の愛の学習を進めていくと真の幸福に近づいていくことができると思います。この学習が進んでいくときの幸福感に注目したいと思います。ある程度の消費や余暇からの生活満足感がないと学習を進めるのは難しいです。消費や余暇からの生活満足感も大切にしながら、良心に対する誘惑であるときには良心を優先できるように成長していくことが真の幸福への道だと思います。

無条件の愛の学習は独学で理論を勉強しても実際に愛せるようにはなっていきません。バイオリンの理論をいくら理解しても実際には弾けないのと同様です。無条件の愛の学習は共同体の中で進み、共同体でのリーダーシップが重要となります。ここではリーダーシップを、リーダーシップ論の権威のジョン・C・マクスウェルに倣って「影響力」と考えることとします。地位があっても影響力のない人はリーダーシップを発揮しているとはいえないし、地位がなくとも強い影響力を発揮する人たちもおられるからです。

マタイによる福音書 25 章 26 節でイエス・キリストは「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。」と教えておられます。これはサーバント・リーダーシップと呼ばれる型のリーダーシップです。支配して権力を振るう支配型リーダーシップではありません。サーバント・リーダーシップで特に重要なのは傾聴することです。

米国の心理学者のカール・ロジャーズは傾聴の 3 原則として

1. 共感的理解（相手の立場に立って共感しながら理解しようとする）
2. 無条件の肯定的関心（善悪や好悪の評価を入れずに肯定的に関心を持って聞く）
3. 自己一致（自分に対しても真摯な態度で聞く）

を挙げています。世界観が違ったり、宗教が違った場合、自分の確信を自己一致で大切にしつつ、自分の確信を絶対視しないで聞く、ということが重要だと思います。

少子高齢化が進んでいく日本は世界の多くの国々では、認知症を発症する高齢者や、発症しないまでも自然な高齢化の影響として認知能力を失っていき、市場を独力で活用できない人々が絶対数でも割合でも多くなっていきます。市場を活用してうまく問題を解決できない場合は、伝統的経済学では公共セクターに期待します。しかし、少子化のために政府財政の危機が進んでいき、公共セクターに全てを頼ることはできなくなっています。このため、共同体の働きが今後は重要性を増していくと考えられます。

サーバントリーダーが多く出て、共同体に貢献する充実感を持って、共同体を立ち上げ発展させていくことが期待されます。共同体にもさまざまな欠点があり、無条件の愛の学習という観点からは、特に共同体の外部の人々に対して排他的になることが多いので注意が必要です。一つの解決方法としては、それぞれの共同体が共同体内の最弱者を大切にすることがあると思います。最弱者は共同体外からも助けを必要とするので、助けてもらったときの感謝から、共同体の輪が広がっていくはずで、例えば、働けなくなった高齢者のいる家庭で、健康で働いている働き手を大切にあまり高齢者を軽視するのではなく、高齢者を大切にすれば、高齢者を助けてくれる家庭外の介護者や医療関係者への感謝から、排他的になることを防ぐことができると思います。

また、無条件の愛の学習は心の成長に関わるので、他の人たちの行動が変わっていくことを望むよりも、第一に自分の心を変えて無条件の愛の学習で成長していくことを重視するのが良いと思います。一見、自分を変えて自分が真に幸福になることに集中することは利己的なように思えます。しかし、無条件の愛に向かって心が変わっていくことが大切であるならば、自分には変えられない人の心ではなく、自分の心の成長に尽力したいと思います。自分の心が成長していくと、サーバント・リーダーシップによって、多くの人々が共鳴して、より良い世界への変化にも貢献できると信じます。新島襄の「良心の全身に充満したる丈夫（ますらお）の起こり来らん事を」という望みに心をあわせて祈っていきたいと思います。